立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０２０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学研究科　日本文学専攻		
研究代表者（2021年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名	
	□博士前期課程　年 ■博士後期課程２年 （学生番号：19PG002J　　）	松本　拓真　印	
指導教員	所属部局・職	氏　名	
	文学部・教授	石川　巧　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	大江健三郎文学研究――「障害者との共生」という物語の再考		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2021年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程・２年	松本　拓真	
研究期間	２０２０　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）　159,341円　／（採択金額）　200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、６０年代の大江健三郎文学における「障害者との共生」という物語を再考するために、「空の怪物アグイー」と「父よ、あなたはどこへ行くのか？」を扱うものである。それぞれの作品は「障害者」という他者といかに関係を築くかという問題を提起している。「空の怪物アグイー」では、今ここにいない障害がある息子の記憶を「われわれ」のなかで分有できるとする態度と、その「われわれ」のなかに巻き込まれていく他者のあり方について論じた。「父よ、あなたはどこへ行くのか？」では、父−僕−「白痴」の息子の三世代を貫く「狂気」の問題と「肥った」身体性とが連関しているという点に注目し、最終的に「肥った」身体を再編する行為を、こうした粘度のあるドロドロとした関連性の輪から跳躍できる身体を生成することとして意味付けた。そのうえで、その行為が父と子の関係にいかなる作用を及ぼしているのかを論じた。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　父と子　〕〔　障害　〕〔　われわれ　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

①「空の怪物アグイー」

「空の怪物アグイー」（『新潮』１９６４年１月号）は、「脳ヘルニア」の赤んぼうを衰弱死させてしまって以来、現実逃避した音楽家Ｄの付き添いとして、大学生の「ぼく」が雇われるという、「ぼく」のアルバイトの体験を描いている。アルバイト当初、Ｄの見る世界を「肯定」していなかったものの、アグイーの情報を収集していくことで、「ぼく」は「もうひとつの世界」に接近していく。そして、十年後ついに一瞬だけ「ぼくの空」から降りてきたアグイーの存在を感じ取る。本研究は、アグイーの存在を肯定していなかった「ぼく」とＤの関係性が、「ぼくら」、さらには「われわれ」へと移り変わっていく過程を追跡し、十年後に、この物語を紡ぎ出す「ぼく」の語りが、「われわれ」以外の他者を「われわれ」のなかに巻き込むものであること論じた。このテクストには「小説家が言葉を紡ぐ行為それ自体」が刻まれているという服部訓和（「幽霊たちの記憶――大江健三郎「空の怪物アグイー」とテクノロジー」、『語文』２０１４年３月）の読解を引き継いだうえで、「ぼく」の語りに、それを外なる他者に向けて語る／書くという構図が含まれているとし、アグイーなるものが「われわれ」のなかで共有できるというＤの認識の滑稽さを物語として紡ぐことが、語り手たる「ぼく」の企図であると指摘した。テクストは、空に浮游するものたちに接近する「ぼく」が、傍観者の立場でいることができなくなる様を描いている。Ｄの最後の日、トラックに轢かれてしまった彼の傍にうずくまる「ぼく」は、「遠方で人間の叫び声がつねに聞こえていたのに、ぼくらのまわりの群衆はうら寒げに黙りこんで、また、それらの叫び声にも無関心なようなのである」と述べる。下村朋世（「大江健三郎『空の怪物アグイー』論―「ぼく」がアグイーと対峙するとき―」、『中央大学大学院論究』２０１４年３月）が指摘する通り、この「ぼくら」という人称は「「まわりの群衆」と「ぼくら」の区別」を強調する表現として読み取れる。また、Ｄは「ぼく」に「もうひとつの世界」を説明する際、中原中也の「含羞」の詩や、Ｗ・ブレイクの「悪魔の饗応を拒絶したもうキリスト」「歌い和する暁の星」、そしてダリの絵を参照する。空中に「半透明」の存在が浮游している情景を描き出す彼らに対し、Ｄは「われわれ」という呼称を用いて関係を結ぶ。十年後「ぼく」は、「子供らの一群」に襲撃された際にアグイーの存在を触知する。「ぼく」にとって、Ｄが説く「われわれの」アグイーという台詞はもはや他人事ではなくなっており、つまり「ぼく」から「ぼくら」へ、そして「われわれの」一部に十年後の「ぼく」が組み込まれる様をテクストは見逃さない。言い換えるならば、「ミイラとりがミイラになるというか、病人の見張番が病人になるという、ちょっぴり深刻でニューロティックなどたばた劇」である。十年後、「ひどく攻撃的になった子供らの一群」に、「ぼく」が「奇妙な」行動をするＤと等しく「恐怖」する対象として見做されてしまうという、まさに滑稽話の様相を呈している。また、テクストにおけるコメディ的な話の筋について考える際、アグイーの形象に用いられている、「熊ほどにも大きい架空のウサギ」が登場する『ハーヴェイ』というアメリカ映画（１９５０年１０月/日本公開１９５２年２月）を参照した。喜劇映画として評されることの多いこの作品は、ジェームス・スチュアートが演じる主人公エルウッド・Ｐ・ダウドと、大ウサギのハーヴェイとの関係を描いている。映像のなかでハーヴェイの実体は描かれておらず、そのため登場人物ひいては観客は、ダウドの言動から間接的にハーヴェイの存在を想像するしかない。観客は、ダウドの語りや振る舞いに翻弄され、次第に彼とハーヴェイの関係に巻き込まれていく。このダウトの語りと「ぼく」の語りは、「われわれ」以外の他者を「われわれ」のなかに巻き込んでいくものであるという意味で相似形をなしている。宋仁善（「もうひとつの世界――大江健三郎の「空の怪物アグイー」論」、『文学研究論集』２００４年３月）が指摘するように、「「ぼく」が経験した話を信じるか否か、という問題は読者に委ねられ」る。その意味で、「一種の滑稽なパロディだと考えて、肯定してもらいたい」と語っていたＤとは異なり、「ぼく」の語りは必ずしも「肯定の相槌」を要求するものではない。しかしながら、この物語を滑稽的に紡ぎ出す「ぼく」の語りは、その滑稽さゆえに「われわれ」以外の読者を「われわれ」のなかへ巻き込んでいく。空の浮游者を幻視する「われわれ」のなかに、「われわれ」以外の他者を絡め取っていく力学を、テクストは内包している。

研究成果の概要（つづき）

②「父よ、あなたはどこへ行くのか？」

テクストは、「ａ裏」（原題「父よ、あなたはどこへ行くのか？」『文学界』１９６８年１０月）と「ｂ表」（原題「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」『新潮』１９６９年２月）からなる中篇小説である。前者は、語り手であり、書き手でもある小説家の僕が、戦時中に土蔵に引きこもっていた「狂気」の父、「前世紀の怪物」の「《全体》」像を復元すべく奔走する物語であるのに対し、三人称で記述される後者は、「ａ裏」の僕と同一人物だと推察される「肥った男」と、その「白痴」の息子、イーヨーとの関係を描く物語である。「ａ裏」では、父と僕の父子関係、「ｂ表」では、「肥った男」とイーヨーの父子関係が基本線となり、父−僕−息子の根源や根拠地をめぐる問題が追求されている。テクストでは、僕が「肥満」というボディイメージを介して、「父親＝僕」、「イーヨー＝肥った男」というアイデンティティを形成する様が描かれる。まず、「肉体＝魂」に刺さる詩の言葉を小説の言葉に置き換え蓄積していく小説家たる僕の企図が、死んだ父に似せて自己の身体を「肥満」化させる行為として、「父親＝僕」、「イーヨー＝肥った男という意識構造」を「帝王」の「国家」や「人間世界全体そのもの」として、自己同一化する対象を肥大化させる行為−−「われらの狂気」−−として描かれていることを指摘し、言葉のあり方とボディイメージ・アイデンティティのあり方とが密接に連関していることを明らかにした。次いで、言葉のあり方という観点では、「ａ裏」に登場する、「体育の専門家」のＫの言葉の使い方が、「正確に短い言葉で、その望むところを表現するタイプ」として、「鯨を簡潔に表現」するメルヴィルの「鯨の定義」式として例えられることに注目した。僕の言葉の使い方が、余分な言葉を積み重ねていく行為としてある一方、「体育の専門家」Ｋの言葉が、短く間接的にまとめられた言葉として、余分なものを削ぎ落とした言葉として描かれる点に目を向け、テクストが言葉のあり方と身体のそれとが密接に関わり合っている物語であることを指摘した。「ｂ表」で母から送られてくる挨拶状の末尾に記された「百閒」の句と「迢空」の短歌は、まさに余分なものを削ぎ落とした言葉としてあり、前者は、「肥った男」を表す言葉として、後者は、父の死の真相を明かす言葉として、いずれも「鯨の定義」式のように両者を定義づける言葉として描かれる。この挨拶状により、「父親の狂気は肥った男の狂気とはすっかり別ものだ」ったことを悟る「肥った男」は、父と息子との繋がりが切断された、まさに「孤児」のように規定されることで、これまで積み重ねてきた言葉を消し去ると同時に、「肥満」した父の顔を写した絵葉書を焼く。彼は、「イーヨー＝肥った男」というアイデンティティの形成に欠かせない、「肥満」した父の記憶表象と、それをもとに蓄積してきた言葉を取り除くのである。そして、最終的に、自らの「肥満」した身体を再編すべく、余分な脂肪を取り除く「肥った男」は、「肥った男」ではなく、「男」として語られる。テクストは、いわば「肥った男」が「男」になる過程を描いた物語であり、言い換えれば、三世代に渡る「狂気」という根源的な問題と、「肥満」というボディイメージの問題とが連関しているという意識を、「肥った男」は余分な脂肪を取り除く行為でもって解体するのである。最後に、この身体を再編する僕の行為を意味付けるうえで、「体育の専門家」のＫによって「鯨の定義」式に規定される「白痴」の息子の存在が、走り跳ぶことができる身体として、「肥満」し一歩も動かない「父親＝僕」のボディイメージと差異化されていたことに注目した。そのうえで、「鯨の定義」式に規定された「白痴」の息子のように、走り跳ぶことができる身体を作り上げる「肥った男」の行為が、三世代に渡る「狂気」の問題と「肥満」的ボディイメージという、まさに粘度のあるドロドロとした関連性の輪から跳躍できる身体の生成することとして描かれていることを明らかにした。

大江健三郎「父よ、あなたはどこへ行くのか？」における僕の余分な言葉を積み重ねる行為は、僕と息子の関係を、うまく短い言葉で言語化できないといった、いわば語りにくさの問題としてある。僕と「白痴」の息子との関係を「鯨の定義」式に「正確に短い言葉で、その望むところを表現」できる言葉を探し求めていく方法として、父の「狂気」を中心とする牽引力の磁場から跳躍できる身体が求められたのだと結論づけた。

※この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
松本拓真、「「われわれ」の空に浮游する「アグイー」――大江健三郎「空の怪物アグイー」論」、『立教大学日本文学』、第１２４号、２０２０年１２月、１０９頁～１２２頁

③ シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
TCS 国際シンポジウム「メディア化された身体/引き裂かれた表象――東アジア冷戦文化の政治性」新世代パネル：身体を生きる/身体を超える―表象される「障がい者」、名古屋大学大学院人文学研究科付属超域社会文化センター、２０２１年１月、オンライン開催（Zoom ウェビナー）、口頭発表「「肥った男」が「男」になる物語――大江健三郎「父よ、あなたはどこへ行くのか？」論」